

目の前に世界地図がある。多少色褪せた世界地図に当時の不思議な世界観が見え隠れする。この地図は1941年（昭和16年）2月に作られた物だ。2年ほど前に新橋のSL側の広場で古本屋の集まりがあり、3500円で購入した。

真珠湾攻撃の原点

ここで私の国際感覚をお伝えしよう。1941年12月7日（現地時間）、航空母艦6隻から発進した航空機はハワイ・パールハーバーを目標とした。戦後多くの日本人とアメリカ人は、このパールハーバー・アタックはスニーク・アタック（姑息な攻撃）だと言う。それは本当だろうか。

実はこの攻撃の1時間前に、同じくパールハーバー・エントランスでパトロールしていたアメリカ海軍ワード号が、近距離から不明の物体に攻撃をかけたのだ。その報告は音声によって第14海軍区の司令官に送られ、アメリカ海軍の責任のもと正式に発表されている。攻撃を受けたのは日本海軍の特殊潜航艇で、5隻がハワイに向かい、3隻が撃沈されたと歴史書にある。

この撃沈された特殊潜航艇はその後どうなったのか。調べてみると、重要な海洋遺産なので引き上げない方針だとか。不思議だ。

2015年にマイクロソフトの共同創業者、故・ポール・アレンさんたちがフィリピンのシブヤン海で日本海軍の戦艦「武蔵」を発見した。そしてこの戦艦を引き上げたい、と報道されたが、現実には難しいだろう。

では、なぜパールハーバーの日本海軍の物とされる特殊潜航艇を引き上げないのだろうか。ましてこの潜航艇はアメリカ領海内にあるのだ。

私は1986年6月22日にこのパールハーバーを訪れた。いまだ兵士が眠り、油が漏れ続ける戦艦アリゾナ・ツアード、ボラントイアだという金髪・ブルーアイの女子大生がこう言い出した。「今回の参加者でアメリカ以外の方は手を挙げてください」

私は手を挙げられなかった。手を挙げたのは数人のヨーロッパの人たちだった。どこか後ろめたい気持ちがあったが、同時にその質問のやり方は姑息だとも感じた。もし、広島や長崎の外国人が多いツアーで、「日本人以外の方は手を挙げて

いまどきの世界観に隔世の感あり

Vol.151



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョシディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

ください」と日本人が案内するように教育されているとしたら、地元の人たちは許すだろうか。

結局、戦後のアメリカでは「日本人のイメー ジは姑息な人間」との方程式ができ上がった。小作人根性の持ち主ならまだしも、まともな民はそんなような屈辱に満ちた対応に我慢できるのか。

私はあの時に日本が正しい選択をしたとは決して思

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

わない。まして英知が集まる日本の大都市圏でも「アメリカのビジネスモデルはダメなんだ」と小馬鹿にする発言を聞くと、「お前の爺さんの墓前でアメリカ人はバカだ」と言ってみろ!」と吠えなくなる。日本人が卑怯者かどうか、屈辱的な歴史観を両国で持つパールハーバー・アタックの原点を、皆さんも調べてみてはいかがでしょう。

当時の日本人はアメリカを敵と見ていたという認識が正しいかどうかよりも、日本の敵はアメリカだったのは事実のようだ。

1998年2月21日にアメリカ・ミネアポリスのホリデーインで元ミネソタ大学の地質学の先生と話をする機会があった。彼はパールハーバー・アタックの前に組織されたフライングタイガースと呼ばれるアメリカ人義勇兵で、パイロットとして日本の航空機と中国で戦ったという。つまり、パールハーバー・アタックは、寝込みを襲う強襲作戦ではなく、それ以前から導火線に火は放たれていたと言えるだろう。

無駄な遺恨は残すまい!

隔世の感があるのは日本人の世界観だけではない。

昨年11月下旬に社員旅行で、間違

えてグアムに行った。本当はアメリカ軍に追い詰められ、数百人とも数千人も言われる民間人を含めた日本人が崖から身を投げ海が赤く染まった場所に慰霊をする計画を練っていた。その場所をグアムだと勘違いして、社員に渡航手続きを任せてしまったのだ。日程も決まったところで、従業員は「バンザイクリフはサイパンらしいですよ」と言った。

マジカー。仕方ないので一人でグアムからサイパンに小1時間飛び、予約したレンタカー屋に向かった。ところが、ない! ハーツ発行の免許書がないのだ。最近レンタカー屋さん発行の免許でも貸してくれるようになったが、それが無いのだ。

財布をこじ開けていると、日本の免許証を見つけたハーツの職員が「それ使えるわよ」と言った。えっ? 「日本語は読めないけど、日本の免許証なら大丈夫」という。後からわかったのだが、ハーツ発行の免許証はグアムのホテルに置いてあった。パスポートで本人確認をして、ミッシのSUV車を一日借りた。ところで、ハーツのカウンターのボードに見かけない文字があった。キリル文字だ。ということは、ロシア人がこのグアムのハーツ・レンタカーに来るのか? ウラジオストク

ク(たぶん)から週に2便あって、ロシアから一番近いアメリカだということでも人気があるらしい。

ミッシSUVのカーナビを見ながらバンザイクリフを目指した。日本から先人たちのために小さなベツトボトルを20個ほど持って来た。到着したそこには……日本人はいなかった。半島系と大陸系のツアー客のみ。バンザイクリフには各県の慰霊碑が手入れされて鎮座していた。中央に置かれた慰霊碑に頭を下

げると、ツアーで来たと思われる半島系の子供が土足で日本人の慰霊碑に上がって来るではないか。横を見ると30歳くらいの父親と目が合った。さすがにマズイと思ったのだろう。子供に話しかけ、慰霊碑から降ろさせた。再度頭を下げ、日本から持ってきた水をサイパンの日差しで乾ききった慰霊碑に捧げた。帰り際に、半島系の親に「カムサハムニダ」と言うと、父親はベコりと頭を下げた。無駄な遺恨は残すまい!とは先人の教えだ。

その後、数カ所を巡った。サイパンの飛行場には北海道の形の鎮魂の碑があった。オホーツク紋別の部隊がこの地で全滅したのだ。なんと北国の部隊がサイパンで……。それも容赦ない戦争の現実なのか。サイパンの宿の近くに戦争記念館

があった。英語、日本語、中国語、朝鮮語のヘッドセットから聞こえてくるのは、「日本は資源がないから南方に進み、現地人を苦しめた!」という解説だ。ヘッドセットを返しに行く、日本人の女性がいた。ご主人は元アメリカ海軍出身で、20年ほどこの地にいるようだ。

さすがにいたたまれなくなり「同じ内容を各国語で発信しているんですよ?」と聞いてみた。「そうなんです、クレームは日本人からはないのですが、中国人がビクビクして、日本人はよく黙っていられますねと言います」と教えてくれた。その日本人女性に「今晚、ご主人と喧嘩してみませんか、戦艦ワード、単語はwaitです」と言っ、屈辱の空間を後にした。

そこで買ったお土産は、パールハーバー・アタックの日の新聞だ。先月、親の家を片付けていたら終戦の日の新聞の原本が見つかった。アメリカ人と日本人の戦争観の違いだろうか。

上皇の誕生日12月23日に東条英機ら7名が絞首刑になった。本当にこの人たちは悪党であり、卑怯者で日本人の恥の象徴だったのだろうか? 私はすべての罪を背負った日本の繁栄の立役者だと思っ。